

学術共通語彙に関する音声知識と文字知識の違い

—中国語および韓国語を第一言語とする日本語学習者に焦点を当てて—

The Gap in Knowledge between Spoken and Written Japanese Common Academic Words:
Focusing on Chinese and Korean Learners of Japanese

○佐藤 尚子^{※1} 松下 達彦^{※2} 笹尾 洋介^{※3} 田島 ますみ^{※4} 橋本 美香^{※5}
SATO, Naoko MATSUSHITA, Tatsuhiko SASAO, Yosuke
TAJIMA, Masumi HASHIMOTO, Mika

キーワード：学術語彙、学術共通語彙テスト、音声モード、文字モード

Keywords: academic words, Japanese Common Academic Word Test, spoken mode, written mode

1. はじめに

大学の講義や教科書には、専門用語のほかに、分野に関わらず学術的な文脈で用いられる学術共通語彙が高頻度で現れる。これらの学術共通語彙の理解は、日本の大学で学ぶ留学生には必須である。日本語の学術共通語彙は漢語の出現頻度が高いため（松下 2011）¹⁾、文字モードによるテストでは、漢字圏の学生が高得点を獲得する傾向にある（松下ほか 2016, 2018）²⁾³⁾。しかしながら、同じ学術共通語彙を聞いたときに同じように理解できるのか疑問がある。そこで本研究グループでは、文字版と同じ問題を使用した音声版のテストを開発した。研究課題は文字リテラシーの高い中国人学生および韓国人学生は音声モードの日本語学術共通語彙を文字モードと同程度に理解できるか、である。

2. 日本語学術共通語彙テスト (Version 2.3)

本発表で取り上げる学術共通語彙とは、一般的なテキストに比べて学術的なテキストでより高い使用率を占める語彙を指す。松下（2011）が日本語の大規模書き言葉コーパスから計量的な手法によって抽出した「日本語学術共通語彙リスト」をもとにテスト開発を行った⁴⁾。今回はVersion 2.3を使用した。

テストの対象語は一般語彙も含めた総合的なデー

タベースにおける使用頻度順位を基準に選定した。頻度順位上位 2 万語の中から 250 語に 1 語を抽出することとし、可能な限り頻度順位が等間隔に近づくように抽出した。そのように抽出した 75 語を対象語とした。テストの形式は、対象語と対象語を含む文を示した後、3 つの選択肢から最も意味が近いものを選ぶ形式である。音声版と文字版は、問題項目は同じだが、出題項目はそれぞれランダムに配列されている。

3. テストの実施

2019 年 8 月～9 月にかけて、韓国で日本語予備教育を受けている韓国人学生 99 名および中国の大学で日本語を主専攻とする学生と第一外国語として学ぶ中国人学生 51 名（朝鮮族の高度な中朝バイリンガル 3 名を含む）、計 150 名に実施した。最初に音声版（20 分）を用いて対象語を伏せた問題用紙を見せ、解答を選ばせた。5 分休憩したのち、文字版（20 分）を実施した。

4. 結果および考察

解答の内的一貫性を示すクロンバック α は音声版が $\alpha = .91$ 、文字版が $\alpha = .88$ で、十分な信頼性のあるテストであった。

テスト結果の基礎統計量を表 1 に示す。1 問 1 点とした 75 点満点のテストで、全体の平均（標準偏差）は音声版が 45.4 (12.5)、文字版が 58.0 (11.2) であった。韓国の学生の平均（標準偏差）は音声版が 49.1 (12.1)、文字版が 57.9 (12.4) で、中国の学生は音

※1 千葉大学国際教養学部教授

※2 東京大学大学院総合文化研究科教授

※3 京都大学国際高等教育院准教授

※4 中央学院大学法学部教授

※5 川崎医科大学医学部准教授

表1 日本語学術共通語彙テストの基礎統計量

| (75点満点) | | 平均 | 最高 | 最低 | 標準偏差 |
|--------------|-----|------|----|----|------|
| 全体 (150名) | 音声版 | 45.4 | 73 | 10 | 12.5 |
| | 文字版 | 58.0 | 73 | 8 | 11.2 |
| 韓国人 (99名) | 音声版 | 49.1 | 73 | 10 | 12.1 |
| | 文字版 | 57.9 | 73 | 8 | 12.4 |
| 中国人 (51名) | 音声版 | 38.4 | 64 | 14 | 10.0 |
| | 文字版 | 58.1 | 69 | 39 | 8.1 |

音声版が 38.4 (10.0)、文字版が 58.1 (8.1) で、どちらの学生も音声版の平均が低かったが、その差は中国の学生のほうが大きく、分散分析の結果、統計的に有意な交互作用が検出された ($F(148)=86.8$, $p<.01$)。音声版と文字版の得点のピアソンの相関係数は韓国の学生が $r=.766$ 、中国の学生が $r=.558$ で、韓国のほうが有意に高かった ($r=2.150$, $p<.05$)。韓国人、中国人学生ともに音声版の平均点が低かった

表2 韓国人学生：音声版の正答率が文字版の正答率を下回っている語 (6語)

| 項目 | 正答率(%) | 正答率の差 (音声-文字) (%) |
|----|--------|-------------------|
| 議事 | 26.3 | -53.5 |
| 強力 | 33.3 | -42.4 |
| 集合 | 54.5 | -39.4 |
| 描画 | 46.5 | -37.4 |
| 廃 | 41.4 | -32.3 |
| 助成 | 40.4 | -31.3 |

表3 中国人学生：音声版の正答率が文字版の正答率を下回っている語 (6語)

| 項目 | 正答率(%) | 正答率の差 (音声-文字) (%) |
|----|--------|-------------------|
| 勝訴 | 29.4 | -68.6 |
| 強力 | 29.4 | -56.9 |
| 拙稿 | 29.4 | -54.9 |
| 下巻 | 35.3 | -52.9 |
| 融和 | 37.3 | -52.9 |
| 凸 | 37.3 | -51.0 |

が、具体的に正答率の低かったのは、表2、表3に示す項目である。表2は韓国人学生の、表3は中国人学生の、それぞれ正答率が低かった6語を示す。

韓国人学生と中国人学生の結果を比較すると、韓国人学生の方が音声版と文字版の相関が高く、正答率の差が小さかった。また、音声版の正答率が文字版を下回っている語彙は、総じて書き言葉で使われる語が多かった。中国人学生の音声版で正答率が低かった語彙は、文字版では母語知識での理解が容易な語が多く見られた。「強力」は韓国人学生も中国人学生も正答率の差が大きかった。これは高頻度の同音語「協力」があるからではないかと考えられる。

5. まとめ、教育への示唆と今後の課題

漢語については、中国人学生の場合、文字モードでは母語知識による理解が先行する傾向が強い。韓国人学生においても、母語である韓国語からの類推が可能な漢語も多く、日本語の音声で理解していない語もあると思われる。漢語の多い学術系の語彙については、音声モードによる学習・教育を強化する必要があることが今回の調査で示唆された。学術語彙を含む聴解やディクテーションなどが有効だと考えられる。

(メールアドレス sophia@faculty.chiba-u.jp)

参考文献

- 1) 松下達彦：日本語の学術共通語彙 (アカデミック・ワード) の抽出と妥当性の検証, 2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集, No.41, pp.244-249 (2011)
- 2) 松下達彦・佐藤尚子・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：第一言語・第二言語としての日本語語彙量と漢字変換力の測定, 2016 年日本語教育学会国際研究大会予稿集 (2016)
- 3) 松下達彦・佐藤尚子・笹尾洋介・田島ますみ・橋本美香：日本語学術共通語彙の習得—第一言語による違いに着目して—, 2018 年日本語教育学会国際研究大会予稿集 (2018)
- 4) 松下達彦：日本語学術共通語彙リスト Ver1.01, <http://www17408ui.sakura.ne.jp/tatsum/VocabularyRoom/index.html> (2019年12月21日参照)

*本研究は JSPS 科研費 18K00679 の助成を受けた。

第22回 専門日本語教育学会研究討論会誌

2020年3月6日発行

© 専門日本語教育学会 2019

専門日本語教育学会事務局

京都産業大学 渡辺史央研究室

〒603-8555 京都市北区上賀茂本山

TEL&FAX: 075-705-1567

E-mail: office-stje@kir.jp

発行：第22回専門日本語教育学会実行委員会

太田亨（金沢大学・委員長）

深澤のぞみ（金沢大学）

深川美帆（金沢大学）

札幌寛子（金沢工業大学）

濱田美和（富山大学）

印刷：有限会社ヤマダスピード製版

TEL: 0120-939-834

〒815-0031 福岡市南区清水2丁目15-30
